

「定年前後」と一括りにするのでなく お客様個々に向き合うアドバイスを

定年前後のお客様に対して資産運用のアドバイスを行う際には、どんなことを心掛けるべきか。リタイアの形が多様化する中、求められるアドバイスとは？

執筆 金指光伸

「定

年」は、人生の大きな「区切り」であり、それを境に環境が変わる「転機」でもある。

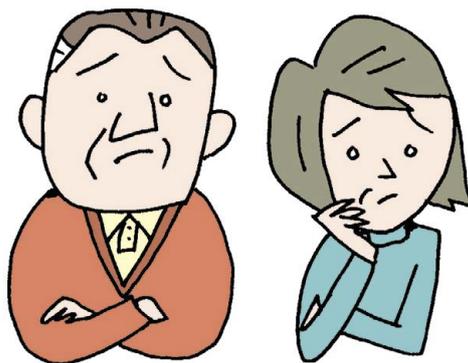
2013年4月に高年齢者雇用安定法が改正され、企業には「65歳までの定年の引上げ」「65歳までの継続雇用制度の導入」「定年の廃止」のいずれかの措置を実施することが義務付けられた。

さらに、2021年4月に施行された同法の改正では、まだ努力義務ではあるものの、70歳までの雇用確保が企業に求められている。「令和2年高年齢者の雇用状況（厚生労働省）」によると、2020年6月時点で、継続雇用制度を導入している企業は76・4%、定年年齢を引き上げている企業は20・9%、

定年制を廃止している企業は2・7%。また、33・4%の企業が65歳を過ぎても働くことができる環境を整えているという調査結果が出ている。

**定年前後のお客様は
まだこれからも
働き続ける”**

こうした中、セカンドライフに関するセミナーでは、サザエさんのお父さんである「波平さん」の年齢がよく話題となる。答えは55歳。漫画の初出は1946年だが、1950年〜52年の男性の平均寿命は59・57歳、1960年でも65・32歳。定年を60歳とする



措置が努力義務とされたのは1986年、義務とされたのは1994年（実施は1998年）で、それまでは55歳だった。

一方、1954年に厚生年金法が改正され、支給開始時期を55歳から60歳に段階的に引き上げることが決定しているため、波平さんは55歳の定年と同時に年金を受給し、10年程度のセカンドライフを悠々自適で過ごすことがイメージされる。